



心豊かに育ちあう

沢の子

令和7年度 重点目標

“すすんで考え学びあう、
笑顔あふれる”
子どもの育成

余市町立沢町小学校 令和7年10月31日(金) 第7号

変化に対応する

校長 森木 真也

北海道にも初雪の便りがやってきました。平年より5日ほど早い本格的な冬の訪れだそうです。登校時には手袋とニット帽に厚手のアウターと、衣替えをしている人も増えてきました。それでも今年の初雪は昨年よりも3日ほど遅いのだそうです。9月までの温暖さを思い出すと、今年は秋が実に短く感じました。山々の紅葉の様子が短い秋を表現しています。

紅葉は葉に含まれる「色素」と「その生成の有無」の違いで黄色と赤に分かれます。仕組みは以下のようになっています。

.....

黄色：もともと葉にある「カロテノイド」という色素が、緑色の「クロロフィル」に分解されることで黄色が目立つようになる現象

赤色：クロロフィルが分解されることに加え、秋に新しく「アントシアニン」という赤い色素が生成されることで起こる

.....

今年の紅葉を見てみると、黄色はきれいなのですが赤が少ないと感じます。そこにも理由があるようで、夏の記録的な暑さの影響で葉が乾燥・ダメージを受け、色づくための色素であるアントシアニンが十分に生成されなかったためだそうです。また、秋の冷え込みが例年より弱かったことも、鮮やかな赤の減少につながったと考えられるようです。一方で、日照時間の長さが光合成を活発にして葉の赤色のもととなる糖分を生成するため、ある程度の暑さと日照は「鮮やかな紅葉」に良い影響を与えるのですが、具体的に今年は気温が低くなる時期が遅かったこと、秋の夜間の気温が高かったことで、赤が少なくなったということです。

さて、とある番組で「トロピカルフルーツが農家の救世主」というタイトルで最近の栽培と市場の様子が紹介されていました。日本の多くの土地では黄色く熟さないが果物にも関わらず、野菜として重宝するのが「青パパイヤ」というのです。大根に似た触感と青臭さはあるもののクセがなく食べやすいとしてサラダや油いためにと、家庭はもちろんレストランでも広く使われているようです。出演していた栽培農家の方によると、青パパイヤは水やりがほとんど不要で追肥も手入れも必要ないとのこと、畑の余地を利用できる新アイテムなのだそうです。また、高温障害にも振り回されることがなく、高齢の農家の方にも栽培の労力がなく続けられることもあり、近年の流通量が増えたようです。さらに、豊富に含む酵素がタンパク質、脂質、糖質の分解を助けるほか、ビタミンC、ポリフェノール、食物繊維、カリウム、カルシウム、マグネシウムなどの栄養素も含まれており、健康や美容に役立つスーパーフードということで、若者にも人気ということでした。

農家で育った私は、ごはん支度をする母に言われ畑にトマトやキュウリを取りにいったものです。しかし子どものころの自分が大人になってサツマイモやゴーヤ、オクラ、ラッカセイなどを実家の畑で見ることなど、想像できませんでした。気候変動の急変やそれに伴う環境変化などにより、10年ひと昔が今では5年ひと昔になったのでしょうか、アーバンベアと言われた一昨年から、この3年間で目撃情報はおろか被害が増加中です。

激動の時代、今まさに対応力を養っていかなくてはならない時。子どもたちにも我々大人にも変化に対応する柔軟さが必要です。今年の残りの2か月、そのことを念頭に過ごしていきたいと思います。